

測 定 する 能 力	論理的言語力	論理的読解力A	論理的読解力B	論理的思考力	論理的表現力
	日本語を論理的に扱う能力。一文の構造を論理的につかまえる力。「ことばのつながり」、指示語・接続後などを論理的に扱う力。	文章を論理的に読む能力。一文の構造を論理的に読む力。趣旨を的確に把握する力。小説などを客観的に読む力。	文章構造を論理的に解説する力。文と文との論理的関係、段落と段落との論理的関係、文全体を論理的構造を把握する力。	文章の要点を論理的に整理し、まとめる力。論理的に話す力。論理的に思考し、自分の考えをおもに記述力・論述力。論理的に書く力。	他者に向かって、論理的に話す力。論理的に思考し、自分の考えを論理的に書く力。

《問題Ⅰ》

論理的言語力

(40点)

●解答

第一問

(1) 行数	7行目	誤	どの主君
(2) 行数	9行目	誤	仕えることが、仕えることで、
(3) 行数	16行目	誤	だから
(4) 行数	5行目	誤	概念が希薄で、

第二問

第二段落…江戸時代を想起  
 第三段落…明治になって西  
 第四段落…近代がもたらし

◆配点

第一問 各5点  
 第二問 第二段落…6点  
 第三・第四段落…各7点

◆解説

第一問

- 直前の「たとえ主君が間違っていたとしても」の「主君」を指しているので、「どの」ではなく、「その」。
- 「主君に仕えることは自分が属する集団に仕えることが、それは疑う余地のないことだったので。」という一文ですが、「主君に仕えること」＝「集団に仕えること」で話が切れるので、主格の「が」ではなく、接続助詞の「で」が適切。
- 接続語の前が「集団の束縛から解放し、自由をもたらしてくれました」とプラスの面であるのに対して、接続語の後で「遂方にくれてしまったのです」とマイナスの面を述べています。そこで、順接の「だから」ではなく、逆接の「ところが」。
- 「江戸時代はまだ国家という概念が、希薄で武士階級の間は、それぞれ家や藩という集団に帰属していました。」の

一文をどこで意味的に切るのかというと、「希薄で」の後。これは、「概念が希薄で」「人間は帰属していました」という二つの主語と述語の関係から明らかです。

第二問

第二段落は、近代的自我という話題の提示。「江戸時代を想起してみてください」から第二段落で、江戸時代には個人と集団との区別がなかったことが述べられています。第三段落では、明治以降は集団から個人を分離する自我が芽生えたこと、第四段落では、当時の人が孤独を抱え込んだことが述べられています。

《問題Ⅱ》

論理的読解力A

(40点)

●解答

第一問

それは人び

第二問

(1) イ (2) オ (3) ア

第三問

A イ B エ C ア

第四問

D オ E ウ

第五問

さて突然何

第五問

演奏に聴き入っている聴衆が息を殺して、身動き一つしない状態。

◆配点

第一問 5点 第二問 各2点  
 第三問 各2点 第四問 5点  
 第五問 10点

◆解説

第一問

欠落文中の指示語の「こんな」に注目。幼児期の「こんな悪戯」にあたる行為は、「人びとの喧嘩のなかに囲まれているとき、両方の耳に指で栓をしてそれを開けたり閉じたりすることです。解答の一文の「それ」は欠落文の内容を指しているため、ここが該当箇所です。

第二問

- 直前に「一小節も聴き落すまいとしながら聴き続けて」とあるから、イ「没入」。
- 直前に「何の批評をするでもなく黙り

合って」とあることから、オ「孤独」。

- 「私」が音楽に感動して、その世界に浸っているときに、軽はずみな口笛を聞いたのだから、私の心がア「嫌悪」に変わったとわかります。
- 演奏会が終わった後の「私」の気持ちなので、エ「寂寥」。

- 直前の「威厳に充ちた姿」が、直後の「あえなくその場に仆れてしまった」のだから、ウ「萎縮」。

第三問

A イの「それ」の指示内容が、直前の「人びとは誰も気がつかない」に当たります。

B エの「それ」の指示内容が、B直前の、

夢のように思い浮かべたこと。

C 直後に「何を意味していたのか夢のようだった」とあるから、ア。

D 直前の「太い首を持った背広服」が、

オの「音楽好きで名高い侯爵」。

E 直前で「言いようもない憂鬱を感じながら」とあるので、ウ。

第四問

「そうかと思うと私の耳は不意に音楽を

離れて、息を凝らして聴き入っている会場の

空気に触れたりした。」の「そう」は

「演奏者の意思からも鳴り響いている音楽

からも遊離しているように感じられた」な

ので、直前の「さて突然何を思ったの

うか。」が余分な一文。

第五問

「石化」について、「人びとは一斉に息を

殺してその微妙な音に絶え入っていた」と

書かれています。「絶え入る」は本来「死

ぬ」という意味の言葉で、「音に絶え入る」

というのは比喩を用いた表現です。具体的

な言葉に置き換えて説明しましょう。

《問題Ⅲ》

論理的思考力

(40点)

●解答

第一問

(1) 私の姉にはかにとえびのアレルギーが

ある。

(2) 幼児に漢字の読みを覚えさせるのは効

果的だ。

第一問

(1) 国民には公的な機関から情報を得る権

利がある。

(公的な機関から情報を得る権利が国

民にはある。)

(2) マスコミには国政の動向を報道する役

割がある。

(国政の動向を報道する役割がマスコ

ミにはある。)

第三問

- (1) 僕と君とは一蓮托生だ。  
(君と僕とは一蓮托生だ。)
- (2) 君の発言はいつも大言壮語だ。

- 第四問 有能
- 第五問 民衆

■配点

第一問	各4点	第二問	各4点
第三問	各4点	第四問	8点
第五問	8点		

◆解説

第一問

- (1) 「アレルギー」が主語で、「ある」が述語、「私の」↓「姉には」↓「ある」「かにと」↓「えびの」↓「アレルギー」↓「ある」とつながります。
- (2) 「覚えさせるのは」が主語で、「効果的だ」が述語。「幼児に」↓「覚えさせる」「漢字の」↓「読みを」↓「覚えさせる」とつながります。

第二問

- (1) 不要な言葉は、「与える」「政治を」。
- (2) 不要な言葉は、「マスコミから」「勢力を」。

第三問

- (1) 「一蓮托生」という四字熟語を発見できたかどうか。
- (2) 「大言壮語」という四字熟語を発見できたかどうか。

第四問

「それは見当違いである」という一文から、無能な部下の話題と反対の内容があとに来るとわかります。また、空所直後の理由を表す文から、「有能」な部下を持つことを述べた文だとわかります。

第五問

空所直前の「それ」の指示内容は世の大勢に支持されていることの間違いです。そうした間違いを公言することを、民衆に異を唱えることと言ひ換えられます。

《問題Ⅳ》 論理的読解力B (40点)

◆解答

第一問 慣れたるこ

第二問

- (1) 絶えず人にこびへつらい、従順に振る舞う習慣。
- (2) 独立の精神がないため。

第三問

支配しやすくするために、民衆がえて無知で従順になるような政策をとったから。

第四問

- (1) ウ
- (2) オ
- (3) ア
- (4) イ
- (5) エ

第五問

- (a) オ
- (b) イ
- (c) エ
- (d) ア
- (e) ウ

■配点

第一問	4点
第二問	各4点
第三問	8点
第四問	各2点
第五問	各2点

◆解説

第一問

欠落文の「このこと」の指示内容が、冒頭から「腰を屈するのみ」まで。さらに、「習い性となる」を受けて、「慣れたることは容易に改め難きものなり」と続く。

第二問

- (1) 指示内容が「常に人を恐れ腰を屈するのみ」までなので、この箇所を自分の言葉で簡潔に答えること。
- (2) 冒頭に「独立の気力なき者は」とある。

第三問

幕府の政策が述べられているのは、「昔鎖国の世に役人の得意となせしこと」まで。それを受けて、「今、外国と交わるの日に至りてはこれがため大なる弊害あり」とある。

第四問

すべて副詞の問題。接続語として用いられる副詞が「すなわち」「たとえば」、修飾語として用いられるのが「実に」「しだいに」。

- (1) 直後の「慣れ」を修飾するので「しだいに」。へつらうことに徐々に慣れるということ。
- (2) 直後の文は「慣れたることは容易に改め難きものなり」の例示なので、「たとえば」。
- (3) 前の流れを受けた上で、より一層便利だという意味なので、「かえって」。
- (4) 「馬鹿らしきよう」を修飾する副詞なので、「実に」。
- (5) 直前の「これ」は直後の文という関係なので、「すなわち」。

第五問

- (a) 「鉄面皮」という言葉を思いうかべることができるかどうか。
- (b) 従順な人を例えたのだから、「犬」。
- (c) 自分でものを考えずに、ひたすら幕府の言いなりになるような民を作ったのだから、「無知」。
- (d) 直前の「蒸気船の速さに驚き」から、「落とした」のは、「肝」。本文の末尾辺りにも「肝をぬかる」という表現が使われていることに注意。
- (e) 直前に「内に居て独立を得ざる者は外にありても」と、「も」を使っていることから、内と同じように、外でも「独立」できないということ。

《問題Ⅴ》 論理的表現力 (40点)

◆解答例

第一問

高度経済成長期には、3Cのように新しく便利な物が次々に登場し、それらを所有することが豊かな暮らしに直結したため、「物の豊かさ」が幸せの一つの指標だと考えられていた。しかし安定成長期に入り、そうした便利なものが普及し物質的に満たされたことで、徐々に「心の豊かさ」を重視する人が増えたからだと考えられる。

第二問

インターネットの普及により情報があふれ、価値観の多様化が進んだ結果、不要な物を処分する断捨離が流行するなど、物に執着しない簡素な暮らしを好む人も増えてきたこと。また、消費活動においても、単に物を購入するモノ消費より、思い出作りや他者との共有、経験を重視するコト消費に人々の関心が移っていること。

■配点

第一問	20点	第二問	20点
-----	-----	-----	-----

◆解説

本問は、あくまで論理的表現力を試すものであり、与えられた条件をもとに筋の通った文を作成できるかどうかのポイントです。

第一問

【使用する言葉】をヒントに論述します。高度経済成長期は、3Cのように新しいものが次々に登場し、物を持つことが豊かな暮らしや幸せに直結した時代です。しかし、その後安定成長期に入り、そうした便利な物が万人に普及した結果、物よりも心の豊かさを求める人が徐々に増えていったと考えられます。

第二問

【使用する言葉】から、記述する内容を考えます。まず「断捨離」は、物に執着せず、不要な物を処分してシンプルな暮らしを追求するもので、最近では多くの人に支持されています。また、単に物を買う「モノ消費」より、友人や家族との思い出作りなど、経験に対して対価を払う「コト消費」が増えているのも、心の豊かさを重視する時代の一面を表すものと言えるでしょう。こうした新しい価値観は、「インターネット」の普及によって様々な情報が行き交い、人々の価値観が多様化したことから生まれたものと考えられます。